マラウイの現場から

第 2 回 **「マラウイの人たちとともに歩んだ 3 年間」**

日本民間国際協力会（NICCO） 現地代表 /
プロジェクトマネージャー 原田悠子さん

（2014 年 9 月掲載）

マラウイに来ることになった経緯

私が初めてアフリカを訪れたのは、大学院で学んでいた時のことです。修士論文のための現地調査と、NGO でのインターンを経験するために、ケニアに 8 か月滞在しました。その際に、多様な文化や広くて青い空、どこから湧いてくるのかわからないエネルギーのようなものに魅せられて、アフリカで働いてみたい、と思うようになりました。また、国際協力がどのように現場で行われ、現地の人々がどのようにそれに関わっているのか、ということに関心がありましたので、国際協力の現場で働くことを志望して、現在所属する日本民間国際協力会（NICCO）に入りました。 最初は前事業地のドーワ県のプロジェクトで調整員として入り、気が付くとマラウイに来てからもう 3 年が経とうとしています。この 3 年間、自分で希望した通り、国際協力の現場で現地の人々と日々試行錯誤しながら働いてこられたことに、とても感謝しています。

NICCO の総合村落保健プロジェクト

NICCO は現在、外務省の日本 NGO 連携無償資金協力の助成を頂いて、マラウイ中部のリロングウェ県の農村地区で包括的な村落保健プロジェクトを行っており（2012 年～2014 年）、私はプロジェクトマネージャーとして、このプロジェクトに関わっています。プロジェクトを実施しているザピタ村は、一番近くの保健センターから 15km ほど離れており、簡単に医療サービスにアクセスすることができません。また、マラリアや住血吸虫症などの感染症が蔓延し、安全な井戸も十分にないことから、下痢症などもよく見られました。医療施設から離れていることもあって、多くの女性たちが村で危険な出産を行っていたため、出産時に死亡するケースも少なくありませんでした。

ザピタ村のようなマラウイの農村で見られる問題は、医療・保健・栄養・農業など様々な問題が複雑に絡み合っています。そこで NICCO は、様々な活動を組み合わせた包括的なプロジェクトを実施しています。例えば、マラリア対策、母子保健活動、HIV/AIDS 対策、井戸建設、エコサントイレ建設、栄養改善、巡回診療、救急自転車の導入などです。ここで全てをご紹介するのは難しいので、今回は「エコサントイレ建設」と「母子保健活動」の 2 つの活動を取り上げてご紹介します。

- **エコサントイレ建設**

ザピタ村で一般的に使われているトイレは、穴掘りボットン便所です。しかし、暗い、臭い、雨季になると崩れてしまったり汚物が流れ出たりして危険、穴がいっぱいになったらまた次の穴を掘らなくてはならない、などの問題がありました。そこで NICCO では、エコロジカル・サニテーショントイレ（通称エコサントイレ）の建設を進めています。

NICCO のエコサントイレ

エコサントイレは地面の上に立てる高床式なので、雨で便や尿が流れ出すこともなく、臭くないのが特徴です。便と尿を分けて集める構造になっており、栄養分の多い尿はすぐに水で薄めて肥料に、また、便は排便のたびにアルカリ性の灰をかけて便槽に寝かせて、半年程度かけて細菌をへらしたうえ衛生化し、たい肥として利用します。たい肥を便槽の側面から取り出した後は、またレンガでふさいで便槽として使用できます。エコサントイレの耐久年数は 20 年で設計されていますので、同じトイレを繰り返し使用することができます。つまり、①衛生改善、②土壌の肥沃化、③化学肥料を購入する支出を抑えられる、持続的な一石三鳥のトイレというわけです。

しかし、便や尿をたい肥として使うというのは、マラウイの人たちにとっては初めての試みです。最初はみんな半信半疑。そこで NICCO は、村人がよく通る村の大通り沿いにデモ農地を数か所設置して比較栽培を行いました。エコサン肥料と尿を使ったプロット、化学肥料を使ったプロット、何も使わないプロットに、マラウイの主食であるトウモロコシを植えたのです。結果は・・・エコサントイレ肥料と尿を使ったプロットでは、何も使わなかったプロットに比べて 1.5 倍～3 倍、化学肥料と比べても同等程度の収穫量でした。これには村の人も納得して、だんだんとエコサントイレ建設希望者が増えていきました。

エコサントイレからたい肥を収穫

実際にエコサントイレを建てた村人に聞いてみると、やはりたい肥を利用することにメリットを感じている農家の方が多いようです。でもこんな声も。「昔のトイレはとても臭かったけど、エコサントイレは全然臭くないから、トイレの前でシマ（マラウイの主食）を食べられるくらいだよ！」とか、「前のボットン便所だと、子どもが落ちるのを怖がって夜はトイレに行かずに家の周りでトイレをしてしまっていたんだけど、今はちゃんとエコサントイレでするようになったよ。おかげで家の周りの衛生環境が良くなった。」など。

こんなふうにマラウイの人たちに支持されて、2007 年から始まった NICCO のエコサントイレ建設は 2014 年に 1000 基建設を達成することができました。

- **母子保健活動**

マラウイの妊産婦死亡率は WHO によると 510 人／100,000 人です（2014 年、ちなみに日本は 6 人／100,000 人です）。この問題に対して、マラウイ政府は「Safe-motherhood（安全なお産）」を進めてきました。その一つの大きな柱が、設備が整った施設での訓練を受けた医療者による出産を推奨することです。マラウイの村には、昔から伝統的産婆（Traditional Birth Attendant）と呼ばれる人たちがいて、村落内での出産を助けてきましたが、彼らは近代的な医療の訓練を受けておらず、近代的な設備も持っていないため、現在ではお産に関わることをマラウイ政府から禁じられています。しかし、2012 年-2013 年の統計によると、いまだ 41%の妊婦が病院施設ではなく、村で伝統的産婆や家族などの訓練を受けていない人たちによって出産しています。

ザピタ村でも NICCO が入った当初は 2 名の伝統的産婆さんが活動していました。村人や彼女たちの話を聞いていると、病院施設から離れた場所でいかに産婆さんたちが村人から頼りにされているかということが伝わってきました。もちろん、妊婦さんたちに安全なお産についての知識が少ない、ということもありますが、それ以外にも病院施設へのアクセスの問題、費用の問題、病院に行くことに対する恐怖（看護師に怒鳴られた経験）など様々な問題があり、単に「病院で出産しましょう」と言ってもなかなか状況は変わりません。そこで NICCO は、村内で一緒に働いてくれる

ボランティアグループ（母子保健委員会）を結成し、そこに伝統的産婆さんも入ってもらって一緒に活動することで、村内で安全なお産に関する意識をゆっくりゆっくり高めていくことにしました。

母親学級で講義をするボランティア

母子保健委員会の主な活動は2つです。1つ目は、村内の妊婦さんの登録。村々をまわって妊婦さんを訪問し、登録とフォローアップを行います。その際には、安全なお産についても個別にじっくり話をします。2つ目は、NICCO が主催する母親学級で講師となり、参加している妊婦さんに対して、出産準備や妊娠中の危険サインについて、また家族計画や HIV/AIDS の母子感染予防などについて話すことです。最初は安全なお産についての知識が乏しく、また人前で話すことも初めてだった委員会メンバーですが、NICCO のトレーニングを受けて練習を繰り返すことで、今では堂々と妊婦さんに対して講義をしています。

マラウイの農村では妊娠を隠す文化があるため、最初は彼らも苦労をしました。しかし、NICCO のスタッフと一緒に村長さんに話に行ったり、母親学級の参加を呼び掛けたり、といった彼らの地道な活動が実り、今では妊婦さんの方から「私を登録して！」と声をかけてくるようになったそうです。また、村内での出産の割合も事業開始当初に比べて半減しました。この結果には彼らも大いに刺激され、NICCO が事業を終了しても活動を続けていきたい！と意気込んでいます。

母親学級に参加した妊婦とボランティアメンバーと一緒に

マラウイでの経験から学んだこと

マラウイに来て初めて現場に出たときは、とまどうこともたくさんありました。例えば、私から見ると非効率なことをやっていたり、生活の改善につながるとわかっていることを実行しなかったり。また、政府の役人が全然仕事をしないように見えたり、モノをもらうことに慣れきっているように見えたり…。どうすれば良いのか、悩むこともたくさんありました。しかし、彼らと一緒に働くうちに、自分が無意識のうちに自分の論理で物事を見てしまっているのでは、ということに気付くことになりました。彼らには彼らの論理があり、背景がある、ということを実際に目で見たり話を聞いたりする中で理解することで、今までの私の経験が形作ってきた自分の考え方の枠組みを意識できるようになり、自分の視野を広げることができたと思います。

また、「物事は複雑で一筋縄ではいかない」ということを嫌というほど経験しました。しかし、同時に、その複雑な状況、過程を楽しんでみる、ということも学ぶことができたと思います。一筋縄ではいかなくても、地道に根気強く相手と向き合えば一歩ずつでも進んでいけますし、時には相手を信頼して任せてみれば、自分では思ってもいなかったようなおもしろい展開になることもありますから。

自分の考えの枠組みを外してみる、難しい状況を楽しんでみる、という心の余裕は、もしかしたら、どこかおおらかで楽しいことが大好きなマラウイの人々の影響がなければ、生まれなかったかもしれません。現在のリロングウェ県でのプロジェクトは 2014 年 12 月で終了予定ですが、今後も、どういう形になるかまだわかりませんが、マラウイの人々とつながっていければ良いな、と思っています。